

岩手県工業技術研究推進会議 生産技術部会議事録	(実施日) 平成16年10月29日(金)
----------------------------	-------------------------

(テーマ名) 漆液を原料とする簡易塗料と塗装技術の開発 (事前評価)
--

委員	質問・意見	回答
H委員	添加剤というのは何であるのか？また、添加剤の配合によって硬化時間を自由に調整できるのか？特許において「添加剤と速く硬化する」ということに新規性があれば、物質で取った方が強い、「漆の塗装技術」となっているが、なぜそこに特許性が認められるのか？	添加剤については、他の物質を入れることは考えていない。漆に元々含まれている水を粘度調整のために使用することは考えている。硬化時間は調整できる。商品化にはバリエーションを増やしユーザーの裾野を広げたい。特許は以前に大野村と「速乾性漆の調整方法」で取得している。「速乾性漆」で取れば良いが、「調整と塗装」を含めたところで検討したいと考えている。
A委員	速乾性の皮膜を作るために漆成分の他に速乾性の皮膜生成を補強するものを入れるということか？入れないということか？	入れない。
	そうすると、速乾性を出すためには重合促進剤のようなものをいれるということか？	現在行っている作り方は、通常、湿度のある雰囲気塗った物を入れると重合が促進され、硬化して固体になるが、塗膜が固まらないうちに攪拌をするというサイクルを繰り返す。8時間で乾く漆にそのような処理を行うと、8時間経っても液状の状態の漆ができる。それを塗装して同じ雰囲気に入れると1時間で硬化するところまで実証した。促進剤を使用しないので速乾性を出している。
	そうすると前処理の過程である程度、個体になる直前まで重合を進め、それを塗るから乾くということか？	そうである。
E委員	従来一日一回の塗装が1時間で乾くということで、製造時間が非常に短縮できるのではないかと考えたが、ここでは2/3程度となっている、その理由は？	塗装以外の研磨作業等の工程を勘案すると合計で2/3程度の短縮になるが、従来にはない製造方法も可能と思われる。先に何回か重ねておき、間に研磨をはさむような行程であれば、より短縮できる可能性はある。
	これらは製造者側のコストダウンに有効であり、漆製品のユーザー側のメリットがないが、耐衝撃性、耐水性、耐久性、割れといったところは、研究内容の速乾性漆の実用化の部分で行うということか？	そうということである。